
彼らの聖域の番人

ご隠居

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼らの聖域の番人

【Nコード】

N4953V

【作者名】

一隠居

【あらすじ】

そこでは、幻獣と呼ばれる獣が世界の王であった。人々は幻獣の住まない土地で国を作り暮らしている。大陸を統一したといわれる伝説的な王の子孫が国々を治め、暮らしていた。

大国の貴族の令嬢と隣国の一人の騎士。二人は神々に出会う。儂くも美しい神話的ファンタジー、始まる

001 (前書き)

あまり、定期的にはできないかもしれませんが

絶壁の上に彼女 アリシエルは立っていた。

馬に乗ったまま、眼下に広がる絶景を呆けているように眺めている。どこかに飛んでいる鳥の鳴く高い声が響く。

風が漆黒と呼べるまでに黒い髪をなびかせる。

今いる高い山の上からは、青々とした森が遙かかなたまで広がっているが見える。

彼女がいる山は登山道が整備されている人の手の入った山だが、それでもこんな山の高いところまで来るような数寄ものはそうないだろう。

今日、ここに来たのは彼女の気まぐれだ。

絶大な国力を持ち、周囲との関係も平穏を保つ祖国。

身分はあるものの、有能な人員が目を光らせ、それぞれの身分で生活が成り立っている国の内部。

そういったものがゆるぎないものであるこの国では、上流階級に属する

貴族や、ジエントリーと呼ばれる高級富裕層が、経済という獲物を虎視眈々と狙う。

日ごろ猫を被っているといえども、気性の激しい彼女にとって、そういった駆け引きや取引はとてつもなく退屈でつまらない物として映っていた。

だが、彼女の立場は重い物である。

この、緑豊かで国土も大きく、交通の要所がいくつか点在している祖国。

『エンデイス王国』

その象徴たるエンデイス国王の王弟、ノーブル公爵の次女。国を支える柱の一人として、重圧が彼女にのしかかっているはず。

しかし、現実はそうではなかった。

彼女はもう一つの役割を持つ。この大陸に伝わる、神々の子孫としての王族。

その神の次期、神子としての役割が。

彼女には、王の親族としての役割はあまり与えられず、王都から少し離れた避暑地で社交界に身を置く生活を与えられている。

社交界とは上流階級の世界。贅沢をよしとする生活を嫌う彼女は、必要最低限の集まりにしか顔を出さず、もっぱら外の世界で過ごしていた。

馬を走らせ野山を駆け巡ることもままあった。

その時いつも、仲の良いだけかしらが付き合わされていたのだ。

そして、そんな時、大体は黄金の色をした髪青年 ウィリアムが相手になっていた。

(まあ、それはそれでたのしいけどさ)

ウィリアムもまた、隣国の貴族である。事情があって、この避暑地に住んでいるのだ。

その事情が、アリシエルの持つしがらみなどと良く似通っていたため、

なんとなく縁ができ、友人として付き合っている。

「風が吹いているぞ。気をつけるよ」

まだ、景色を眺めているアリシエルに、いまさらな注意を促す。すると、ゆっくりこちらを向いて、少し不機嫌そうに言った。

「大丈夫よ。こんな程度で落ちる間抜けじゃないわ。でも」

馬は降りましょう。そう言って、道に戻り始めた。

ウィリアムは追いついて、崖から少し離れた道とともに進む。

「どこで降りる？」

「いつもの場所で良いでしょ」

この先には、開けた花畑がある。

標高が高く、いつも多少の風が吹くこの山で、のどかで居心地のいい場所だ。

アリシエルは出かけるとき、大体の場所を覚えてくれるので、その場所に合わせた荷物を用意していた。

今日は、ピクニックセット。家の使用人に頼んで作らせたもの。せっかくなので、野外でできる遊戯でもしよう。道具を一揃え持ってきている。

しかし、今日は勝手が違った。アリシエルがあるものを見つけたのだ。

馬をとめ、左に広がる森に中を見つめる。

ウィリアムもまた、森の中を見た。

青白い光が森を照らしていた。林に青白い光が反射し、その奥に光を放つ何かがある。

その光は、何か力を帯びている。

「ウィリアム、馬を見ていて」

力というものに敏感なアリシエルは、それに興味を覚えた。そうでなくても、不思議なものに彼女は目がない。

彼女は馬を飛びおり、好奇心が向かうまま、林の奥に入っていく。ウィリアムはあわててアリシエルの馬の手綱を取り、しっかりと押さえる。

「おい、ちょっと待てよ！」

声をかけた時にはすでに、彼女は林の中に入ってしまっている。森の光は絶えずあふれ、不思議な雰囲気を漂わせる。

何か力あるもの。

人を惑わせるようなものではなく、神々しい聖地に満ちるような偉大な力の気配。

ウィリアムも肌がひりつくような感覚を覚えていた。いらぬ悪態をつく。

「なんでこんなものがあるんだよ！」

不思議なものにひかれるのが、アリシエルの性。分かっているからこそ、この出会いを嘆く。

馬を手ごころな草場に縛り付け、後を追った。

茂みを払い、足もとの悪い森の地面を踏みしめながら、足跡を追う。近づくにつれて、感じる力の大きさは少しばかり恐怖を覚えるほどになっていった。

追いつけそうになった時、ふっと光が消えた。
不安に思い、足早に光の流れ出ていた元に向かうと、森の広場に
いた。

木が円となつて、小さな空間を作り出している。

音もほとんど聞こえず時折、鳥の鳴く和音のような響きが辺りに流
れるだけ。

空からの日光は、木漏れ日となつて幾筋もの閃光となっていた。

とても居心地のよさそうな場所であつた。

周りの中で一番大きな木。その前に、アリシエルは立っていた。
その手には、小さな宝石みたいなものが握られている。

「それはなんだ？」

ゆっくりと近づきながらもきく

「ブローチ……………みたいね」

アリシエルは拾い上げたそれを、手のひらに乗せて見せてくれた。

きれいだと思った。それは確かにブローチだった。

十字のブローチ、銀の輝きが美しく薄暗い森の中でも、強い光を見
せる。

おそらく鳥をモチーフにしてあるのだろう。

それも鷲や鷹のような猛禽類ではなく、自由に世界を渡る渡り鳥。
十字は鳥の羽根を思わせるような、流麗な彫りが入っていた。

アリシエルもそう思った。

おもちゃを見つけた子供のように笑っていた。

「こんなものがなんで、森の中にあるのかしら」

「なんでだろう。まさか、宝石商がこんなところまで来るわけがないし……………」

「こんな大きな宝石を落とすなんてありえないわ」

「そうだな、でもそれ以外にどうやって……。でも、見たことあるような」

「そう。なんか、見たことあるのよねえ」

ブローチの真ん中にあつらえてある宝石を、アリシエルは見つめた。

それは、大きな卵型の宝石である。

翠色とも青色ともつかぬ色合いが、宝石の中で何度も屈折してキラキラ光る。

アリシエルが手の中で遊んでみると、光の反射の具合が変わりウィリアムとアリシエルの顔や地面を優しく照らす。

始めに見えた青白い光はこれが放っていた。

アリシエルが手に取ったとたん消えてしまったが。

「とりあえず、これどうする？」

「仕方ないわ。一回持って帰って、ふれをだしましょう。そうしたら、持ち主もみつかるでしょ？」

「でも、ここは境の山脈だし、持って帰るのはまずいんじゃないか？」

あたりを見回して、ウィリアムは少し顔をしかめて言う。
それを聞くと、アリシエルも悩んでしまう。

エンデイス王国からこの山脈を越えると、先ほどアリシエルが見下ろしていた森が広がっている。

その森の名前は、『王座の森』と呼ばれていた。

その人知が及ばないその森とこの山脈 『境の山』のまつわる言い伝えの一つにこんなものがある。

境の山で珍しい物を見つけたのなら、それを拾ってはいけないよ。

山菜や果物、それに動物はよい、それでも取り過ぎはいけないがね。

珍しい物、特に森にそぐわない物はいけないよ。

それは王座の森の王が落ちたものに違いない。

それを持って帰ると、森の王はお怒りになる。

森の王は、世界の妖精の、精霊の王。冥界の門番。

そして、いと恐ろしき神々の王座にある者なのだから。

怒りの触れると人など消えてなくなる。

いいかい、玉座の森では珍しい物を拾ってはいけないよ

このような言い伝えがあるから、この森には人が少ない。
だからこそ、アリシエル達の隠れ家として使っていたのだ。

しかし、今回はその《森にそぐわない物》を拾ってしまった。
ウィリアムはその伝承を気にして、止めたのだ。

普通は見れないほどの大きさの宝石が付いた、これまた妙技と言える技巧をこらした

ブローチ。

さらには、強い光を放ち、強い力を持つ存在。

なるほど、人の入らぬ森にこれほどそぐわない物はない。

ふもとや山中に、人嫌いの彫金師なりなんなりが住んでいるとなれば別だが、

あいにく、ここによく来て久しいウィリアムの耳にもそんな話は届いていない。

つい、そんな話があればよかったのに。と、嘆いてしまう。

「うーん……………いいじゃない？これくらいなら」

ね！つと輝かし笑みを浮かべる彼女を、ウィリアムは止められたためしかなかった。

「仕方ない、帰ったら直に触れを出すぞ、いいな！！」

立っただけでも仕方ない、とりあえず始めの予定に戻ろうとする。

相変わらず、風は空からそよぎ空からは鳥の鳴く美しい声が聞こえてくる。

森の外に出て、馬を取りに行った。馬に乗り、少し先の花畑を目指す。

アリシエルは、すっかりブローチを持っていた。

一応、口を出してみるが「いいじゃない、かたいこといわないの。」とやはり話を取り合ってくれなかった。

人のものであるので、あまり勝手にするのは気が進まないが、自分ではどうしようもない。

道なりに進むと、花畑に着く。

しかし、もう少しのところまで馬たちがおびえ始めた。

とっさに手綱を引き、宥めようとするが止まらない。

アリシエルの馬も暴れそうになっていた。

「ちょっと、何なのこれ!？」

「俺も知らねえよっと」

馬の暴れる勢いに乗って、木の枝をつかんだ。そのまま、するすると木を下りる。

アリシエルは飛びおりたようだ。落ちるときの勢いを殺すため、しやがみ込んでいた。
すると、馬は途端に大人しくなる。
近づいても平気だ。

「何だったんだろっな」

「ほんとね、どうしてかしら。まさかこれのせい？」

落とさないように、かばんに入れてあるブローチを示す。

返事をしようとする、一陣の風が山頂から吹き付ける。
体が風であおられ、一歩二歩と動く。

「おかしいわ、いつもはこんなに風は強くないのに」

言われてみればそううだ。山は風が強いし天候も変わりやすい。
しかし、こう強い風が何度も吹くのは、この穏やかな山ではめったにない。

何かが変だ。

このまま帰った方がいい気がする。

「今日は、様子がおかしい。行くのはやめ……………」

その言葉は、鳥の鳴き声にかき消された。

森の端から端まで響き渡る澄んだ鈴のような鳴き声。

木々の間を幾度も反響し、和音を奏でる。

普段聞いたなら、ただ美しいとだけ思えただろう。

しかし、今この時に聞くこの声は、不安を誘うように聞こえた。

それ以上に思ったのは、この声に力が宿っていたことだった。

魔力、ともいえる。

ただの鳥類にはありえない。この近くの名高い森に住む獣たちでなくては。

「ウィリアム！大丈夫！？」

風が弱まったところで、アリシエルはウィリアムの近くに来る。

「ああ、問題ない。けど、やばいな。こんなところで幻獣に鉢合わせるなんて」

「森に戻りましょう。開けたところにいるより、森に身を隠している方が安全だわ」

言うが早い、森へ足早に駆けていく。

ウィリアムも、襲われたらたまらないとばかりに後に続く。

《幻獣》とは、高度な知恵と寿命を持つ獣たちのことである。

彼らは賢く、人を襲うような無謀なこととはしない。

それこそ、何か人が害を成さなければ。

そこでまた、拾ったブローチと森にまつわる言い伝えが頭をよぎる。

まさか、あれのせいなのか。大きいとはいえただの宝石が？

しかし、ただの宝石でないことはすぐに思いいたる。
力を持ち、人を威圧する光を放つ靈器。

そんなものが、ただの宝石であるはずがない。

『我が王の玉を返せ、人の子よ。さすれば、そなたらの巢に返した
もうぞ』

鳥の姿が現れ、怒りに満ちた声が聞こえる。

「アリシエル！ブローチを投げろ！！」

「えっ！？なんで？」

「多分それが、あいつの目当てだ！」

アリシエルが、かばんから取り出そうとするが、走りながらではう
まくいかない。

『返せ！！』

巨大な鳥。猛禽類の王のような巨鳥が見えたと思うと、今までが
比べ物にならないほどの
突風が今度は森から迸る。

ウィリアムは、風にあおられ、ついには吹き飛ばされた。
木に背がぶつかり、衝撃で息が途切れる。

横には、すでに体制を整えて、アリシエルが巨鳥をにらみつける。
手には魔法陣が交差するように二つ、手のうちに仄かな光を宿らせ
る。

「森の奥へ！！先に行きなさい！！」

「おまえも来い！！」

《幻獣》と呼ばれる生き物に、人の使う魔法は通用しない。

だが、勝気な彼女はそれも気にしないだろう。

呼び寄せる手間も惜しんでウイリアムは彼女をわきに抱える。

非難の声が聞こえたが、相手をしている暇はない。

乱立する木々をよけて走るのはつらく、地面は森の落ち葉で腐葉土となっていて、木の根が時折飛び出ていて走りにくい。

山歩きが得意なウイリアムでもつらい物がある。

それに、相手取っているのは天空を自由に駆ける賢い獣。

騎士の端くれとは言え、貴族の子供が相手取れる相手ではない。

しかし、ここは逃げるしかない。

だんだん、アリシエルを抱えているのが大変になっていたが、森歩きにまだ慣れない彼女を走らせるよりましだろう。

「あそこに、隠れられない！！」

木のうろを指したが、ウイリアムは首を振る。

「だめだ、肌の色ではれてしまう」

人の肌の色は、案外暗色の多い森の中で目立つ。

貴族然とした二人ではなおさらだ。

言っても仕方がないが、散策用のゆつたりとした服を着てきたのが悔やまれる。

遊びと侮っていたかもしれない。

森は何が起こるか分からないのに、きちんとした登山服を着てこな

かった。

前から見える光が、段々と強くなる。
森が急に開けた。

(出てしまった！)

開けた場所に、足を一步踏み入れるとその先は崖だった。

「うわっ！！！！！！」

どちらの声かは分からない。どちらも叫んだのかもしれない。
止まろうとすると、巨鳥の羽ばたきが風を使って背中を押し。

ふっと、地面が消えた。そう思った。

次に分かったのは、眼下に広がる一面の木々。

崖から飛ばされたのだ。

戻ろうとあかく。空に体が向き、はからずとも巨鳥が見えた。

場違いにも、美しいと思った。その生命の力に満ちた、なめらかな
翼が。

巨鳥に怒りがこもった一喝を受けると、彼の意識は闇に落ちた。

パチツ、パチツ。松明か、それとも焚き木か。

火の爆ぜる音が、ウィリアムのまだ醒めぬ意識のうちに響いてきた。崖から飛び出た衝撃で薄れていた体の感覚も、だんだん戻ってくる。体の下を感じる硬い麻か何かの感触。それに絹のような柔らかい物が体にかけられている。

うつすらと目を開けると、丸太で組まれた天井が見えた。体を起こして、周りを見回そうとする。

起こした動作で全身に鈍い痛みが貫いた。なんだか頭痛もする。

やはり、自分は崖から落ちたのだろうか。

しかし、落ちていたらこんなところにはいないだろう。

周りを見回すと、どうも小ざっぱりとした部屋だった。

寝室、もしくは客室だろう。

壁も天井と同じ、木で組まれ床はしっかりとした建築に適した木材で敷かれている。

部屋の広さは、庶民的な四大家族が住めるくらい広く、

貴族の寝室のようである。

しかし、貴族のような見栄や体面を気にした飾りではなく、生活に必要なものを、暮らしの妨げにならないように飾った素朴なものであった。

棚や、机。ソファに小椅子が並べられている。

太陽の紅い光が寂しげない陰影を部屋にもたらす。

化粧台などの女性が使うものがないところをみるとこの部屋の主は男性かもしれない。

部屋の扉のある方にベランダがあるようなので、外に出ようかと思つた。

だが、目を向けていた方の反対から、聞き覚えのある声が聞こえ、そつちを向いた。

アリシエルも、隣に並べられたベッドで寝ていた。

さっきのはただの寝言だったようだ。

時折走る痛みをこらえ、彼女の枕元まで行く。

さっと、様子をみると特にけがはないようだ。

ほっと一息つき、とりあえずの確認が済むと、今度は自分の今に對する不安が浮かんでくる。

ここはどこか。主は誰なのか。

あまりにも分からないことが多すぎて、どこから手をつければいいのか分からない。

暖炉の火がはじける音がまた聞こえる。

先ほどよりも火が弱くなっている。

寒くなつてはかなわない。火に薪をくべる。

三脚椅子を暖炉のそばに見つけたのでアリシエルのそばに持つてくる。

暖炉の火は心地よい。家の作りも立派なものである。

しっかりと隙間風を防いでいる。

一応とはいえ軍人の身、ぼろ屋にも泊ったことはある。

隙間風の寒さは身にしみている。

そこまで考えてみると、この家はなんだかおかしい気がする。

森の奥、獣たちの領分。

そこに建つ、質素ながらも立派な家。

「起きたか」

低い声だった。ハッと、声の主に目を向ける。

部屋の戸、そこにいたのは、男だった。男、としか形容できない気がする。

身長は高く、細身に見える。

歳は、二十歳をいくのだろうか。目つきが鋭く、頑固な青年に見える。

けれど、肩までかかる髪は僅かな黒髪を残して、ほぼ白髪。老人のような白髪である。

思ったより年老いているのだろうか。

しかし、剣を持つ者のよく研ぎ澄まされた視線をウィリアムは感じた。

まるで、屋敷にいる彼の師範のよう。

間違いなく、武人。それも強い。

師匠の教えに従い、少しばかり体の向きを変える。

何が起きてもすぐに立って応戦できるように。

後ろには眠っている婦女、お転婆とはいえ長い付き合い。

守ってやらねば、筋がたたない。

そのわずかな動作にその男は眉をひそめる。

手に持っている木のトレイを部屋の真ん中にある机に置いた。

「俺は何かしようってわけじゃない。剣は置け。

自宅で客人に剣を持たれるのは面白くない。」

それでも、構えはとかない。

「質問をしてもいいか」

「まずお前は、ベッドに戻れ。まだ、体が治りきっていない」

男が近づいてくる、警戒を強くする。
なめらかな動きで首根っこをつかまれ、気が付くとベッドに寝転が
されていた。

身構えていたのに、反射できなかった。
すぐに起きて相手を見る。

目の前の男は、壁に置いてあった椅子を引つ張り出して、ついで
にトレイも手に取り、ウィリアムと対峙する様に座った。

「あなたが助けてくれたのか」

「ああ、そうだ」

持ってきた紅茶を、カップに注いでいる。

ほれ、と渡されたので大人しくもらっておく。

暖かい紅茶は、暖炉のある部屋でも嬉しい。

じっと見ているのをどう取ったのか、

毒は入っていない。と、言われた。

男は、紅茶を飲んで、満足そうに眼をつむる。

その姿は、老人のように見えた。

カップをソーサラ において、椅子に背もたれに寄りかかり
こっちを見る。

じつと見返すと、まだ見てくる。

やっと、ウィリアムが紅茶を飲むのを待っているのだと気づくと、

少しだけ口を付けた。おいしい。

物がいいのか、口当たりがさわやかで柔らかい。

「どうだ、うまいか」

「あ、はっ、はい」

段々最初の調子がくるっってきて、どもってしまっただが、何とかこたえる・

やっと、目が離れた。

自分の紅茶を注ぎ直し、お茶菓子のクッキーを食べている。

目つきが鋭く、硬い面構えの彼の視線は、

狩りをする前の獣の品定めに見えて結構怖い。

そうかそうか、それは良かった。なんて言ってお茶を飲んでいる。

段々悪い人ではないような気がしてきた。ぼーっと呆けていると、また勧められた。

話を切り出そうにも、切り出しにくい。

やっと、話を切り出せたのは彼が持ってきたお茶菓子が切れたころ合い。

もう、ウィリアムが手に持った紅茶はぬるくなった時だった。

「俺は、崖から落ちたのですか」

彼は紅茶の最後の一杯に、ポットの最後の一滴を注ごうとしていた。

ティーポットのふたを抑えて、滴がカップに落ちるのを気長に待っている。

一滴、二滴、三滴。

もう、滴も落ちてこなくなった。

やっと、彼は口を開く。

「そうだ。そして、俺が助けた」

ポットを置いて、座り直す。

視線はしっかりとウィリアムを射抜く。

「だが、礼を言われる必要はないかもしれない」

「なぜ？」

「お前が、落ちた原因は何か」

山へ遊びに来ていたこと。不思議な宝石を拾ったこと。

巨大な鳥に襲われたこと。

話にするのは簡単だった。隠すことでもない、内容は納得がいかないことはあるけれど、

獣のなわばりを侵してしまった。それだけの話だ。

話すことができないのはその時味わった恐怖と、アリシエルの身分くらいか。

自分の身分も交えても、説明するにはそうそうかからなかった。

「そうか、お前はモーリスの国の者か」

モーリスの国はウィリアムの国の古称である。建国の英雄に名になぞらえてそう呼ばれていた。

古称であるので、今はもう古典文学が儀式くらいにしか出てこない名だ。

珍しい言葉を使うと思う。

「それに、境の森を遊び場に使っていたとは、なかなか剛毅なことだ。

あそこは、人には危ない生き物も多くいるというのに」

「今は、ちょっと反省しています。危ない目にあってしまいました」

「今後はあまり近づかぬ方がいい。幻獣たちに襲われるかもしれん」

「ええ、鳥に空から襲われるのもうごめんです」

「いや、それだけではない。話を戻そうか。

お前たちが襲われたのは、お前が拾ったブローチのせいだろう」

ウィリアムは納得できたようなそうでないような気持ちになった。確かに言い伝えはあるが、それだけで襲われるようなものだろうか。

「襲われても仕方あるまい。これにはそれだけの価値がある」

彼は上着の内から、件のブローチを取り出した。

彼の手の中にあるブローチは、相変わらず美しい。

しかし、なぜだろう。心なしか色が初めて見たときより澄んでいる気がする。

「その宝石……………初めて見たときは、ひとりで星のように輝いていました。

拾った後は、普通では会うことのない獣に出会いました。

そして不思議な力を持つその宝石はなんなのですか」

まるで乞い願うように、疑問を口にする。

男の視線はその鋭さを増していく。遙かな高みから眺められているような、

価値を知るに値するかを探るような。

そして、そつと口を開く。

「お前もきいただろう、幻獣が言っているのを」

確かに聞いた。

「『我が王の玉を返せ』と言っていました。」

「ここでの王とは誰か分かるな」

ウィリアムは頷く。

この《玉座の森》の玉座の意味は、王が住まうための玉座となる森。という意味である。

そして、それは幻獣たちにとっての王。

《悲哀の神王》と呼ばれる神々の王であった。

「信じられません」

「事実だ、しかたあるまい。ともかく、これは力ある」

彼はブローチを手のひらに乗せ、それをじっと見た。
大切な宝物を見る目だった。

「これは幻獣たちの、そして神々の王の持ち物だ。それをお前が盗むのだと思ったのだろう。獣たちは必死になってそれを取り戻そうとした」

「私たちは……………」

「盗んでいない、拾っただけ。だが、獣たちにとって差はない。人が彼らの主の物を持っていこうとした。不幸だったな。しばらく、休んでいくといい。この森を今から出て行くのは危険だ。」

まだ、彼らの気が昂っている。森が静かになるまではここにいろ。むやみに出れば、あつという間に人間なんぞ踏みつぶされてしまう。それに傷を癒さなければ、森を出られない」

ウイリアムは黙り込んでしまった。

早急に森を抜けなければいけない。

アリシエルの行方が知れず、屋敷の者も戸惑っているだろう。

幾日かすれば、王都にも話が回る。

王族の地に連なる者が、他国の貴族といなくなった。

戦争の理由としては十分だ。

だが、自分の体をみると傷こそ森の木々でついた小さな物しかないが

落ちた衝撃で体の内側は悲鳴をあげている。

不思議と骨折などの大きなけがはないがそれでも幾日かは動けない。

「あなたの……………あなたの名前は何と言いますか」

男は少し顔をしかめた。

「ふむ、どう名乗ろうか。こんな、辺鄙なところに住む者の名だ。それに俺の名前には力がある。知るとなにかが変わってしまうかもしれない。それでもいいか」

うなづくウィリアム。

「では、俺の名前はアルバス。ただのアルバス。名前をすべて教えるのはまたいつかにしよう。今はここまで教えるに留めよう。」

もし何かの拍子で私の名を知っても口にしてはならない。私が直々の教えるまでは。

ウィリアムと言ったか、お前にそこまでの力がそなうことを願って」

名を聞くと、ウィリアムは椅子から立ち、

アルバスと名乗った男の前に跪き、まだ包帯の巻かれている右腕を胸に寄せる。

騎士の礼。恩を受けた者への敬意を示す形。

彼は、曇天の色の目をしかとアルバスに向ける。

「改めて名乗りましょう。私の名前はウィリアム・ベル・グレンジヤー。」

この森を越えて、国を一つ越え、大河をはさんだ先にある国。大きな砦のある国の者です。此度の御恩、深く感謝します。今しばらく、あなたの軒先を借りることをお許しく下さい」

意思の籠った眼、彼はこの恩を忘れないだろう。

それが本当と分かる。
ならば、答えてやろう。
アルバスはそう思う。

「良い暇つぶしとなるだろう。一つ言っておく。
おそらくお前は、その瞳の色のような嵐の中へ突き進むこととなる
だろう。」

この縁が良きものとなればよいのだが」

予言のような神託のような言葉、人であろうその身で何が分かる
と思うかもしれない。

しかし、獣の森に住む人の言葉はひどく意味を持つように思えた。
ウィリアムは、神託を受けた神官のごとく深く首を垂れる。

夕陽が沈みきる前の最後に光を放つ。
色濃い深紅、最後の光は強く輝く。
二人を照らし、お互いに深い影を作る。

アルバスの姿は夕陽の陰で輪郭だけのようになっていた。
それは、あたかも予言者のようで
ウィリアムはこの姿を一生忘れることができないだろう。

そう、思った。

001 (後書き)

ご感想があれば、よろしくお願いします。

002 (前書き)

とつても頑張りました。八月中はやりきって見せる。
そのあとは無理。ああ、詩心がほしい。

森に朝が来た。窓には霜が降りる。

冷たい冷気が辺りを漂っている。ここが森なんだと思った。

目覚め始めた鳥たちの鳴き声が辺りから聞こえてくる。

一晩明けると体調も戻ってくる。

昨日はあの後、しばらく好きなようにしてて良いと言われた。

家の造りも一通り教わって、不自由しないくらいにはなっている。

朝日が昇るころに起きて、軽く朝稽古をした。

剣はなくてもできることはあるし、そこらへんに落ちている木の枝で代わりにもできそうだ。

この森の木は普通とは比較にならないくらい大きい。

王都にある王城とおなじくらい高いかもしれない。

それに応じて、木の枝もとても太かった。

それが今、幻獣の森にいるのだと実感させられた。

水汲み場で汗を流している今も、水の清さがそれを感じさせる。

ありとあらゆることが、ここが人の長くいる場所ではないと思わせる。

それこそ、今彼が背にしている木造の家がおかしく思えるほどに。

「おはよう」

簡単な無地の服を着たアリシエルが歩いてきた。着てきた服は破けていて、使って使えないことはないけれどあまり使い物にならない

い。

「おはよう、体は？」

昨日の夜、彼女は目を覚ました。

アルバスと同じように木の枝で傷を多く負っていたが、大事になる怪我はなかったようだ。

負った傷も跡が残るようなものではない。

「元気元気、大丈夫。」

そう言って、ウィリアムを押しつけて顔を洗う。

パシャパシャと音を立てて顔を洗い、水を払う猫のように顔をふるふると振る。

漆黒の髪は、空気を包むように広がる。

ゆっくりと肩にまとまっていく。

「はい、これ」

もう一枚、持っていたタオルを手渡す。ありがとう、と言ってひったくられる。可愛げのない。

「ねえ、ウィリアム」

アリシエルは、くしゃくしゃにしたタオルを投げつける。

「なんだ」

タオルを投げつけられながらも答える。顔に投げつけられたタオルは空中で掴んで、手持ちの者と一緒に片手で持つ。

彼女は、手櫛で髪をくしけずる。まとまっていく髪は小川の流れのよう。

「アルバスって、何者なのかしら」

「確かに不思議だよな。こんな森に住んでいるし、なんだかいろいろやけに詳しいし」

「ちよつと、知りたいと思わない？」

アリシエルの瞳に危ない光が走る。何かちよつかいをかけたがる猫の鋭い瞳。

ブローチを拾って死にそうになった後とは思えない。

「いや、しばらく大人しくしているよ。つい昨日大怪我したばかりだろ！」

「やーね、それはそれよ。知りたいでしょ！はい決まり」

目を太陽みたいにキラキラさせてるアリシエルは暴走機関車のごとくだ。

簡単には止められない。

服をしつかりと着て、勢いに引つ張られないように心構える。

「駄目だ、恩人だろ！迷惑かけないようにしないと」

「知りたいでしょ！だって、玉座の森に人が住んでいるのよ。人知が及ばないはずの土地に住む世捨て人。こんなに気になる言葉はないじゃない。」

「ちよつと、本棚をあさるだけよ。ね？」

ずいっと、顔を寄せてくる。期待に輝く表情はひどくまぶしい。瞳の透明な青さに驚く、何度見ても慣れない。

「好奇心に輝く瞳を無視して、言葉をひねり出すのは思ったより大変だった。」

「気になるくらい訳アリってことだろ。あんまり、深入りするもんじゃない」

アリシエルはすねた顔で不満をぶつける。ウィリアムは、たじろぐがそれでも、

「聞く耳は持たない。」

「甘いのと優しいのは違うと思う。」

ここではウィリアムたちは、その場を過ぎる旅人なのだから彼にむやみな影響を与える必要はない。

「ほら、もうご飯のようだ」

辺りに漂う森の木々と朝露のにおいに混ざって、香ばしいにおいが漂っていた。

大きな木の家の煙突からは煙が出ている。

彼の料理の腕前はいかがなものだろうか。益体のないことが頭をよ

ぎった。

広いキッチンの食卓に並べられた朝食はそれは豪華なものであった。

手製のパンに良く煮込まれた山菜スープなど、素朴ながらも手の込んだものになっている。

「おお、美味しい。これ、アルバスが作ったのか？」

「料理は通り一遍はできる、そうじゃなきゃこんなところには住めない」

「それもそうだ」

「おっおいしい……………」

なんだか、アリシエルがショックを受けている気がしないでもないが気にしてはいけない。

テーブルマナーを気にしなくていい食事は、気が楽でいい。

二人とも、堅い食事は好きではなかった。

二人でよく、野山を駆け巡っているからだろうか。

他の貴族の子弟より、二人の気質は荒っぽい。

ウィリアムは軍門の徒であるからよしとしているが、神殿の人間のアリシエルは喜ばしいことではないだろうと、いつも注意しているが、ウィリアムの言葉には説得力がない。結果、このような場では、二人で騒ぎながら食べることになってしまう。

数時間、顔を合わせただけでも分かるくらい寡黙なアルバスに嫌な顔をされると思ったが、何も言われなかった。少し意外に思う。

黙々と食べていたアルバスが真っ先に、匙を置く。

「ウィリアムたちの怪我はあといく日かで治るだろう。そうしたら、アーサーの国にまで送ってやる」

「アーサーの国って？」

「エンデイス王国のことよ」

アリシエルは好奇の目を彼に向ける。楽しそうなおもちやを見つけた時の目。
ウィリアムで遊んでいるときの目だ。

「お前たちは貴族に連なる者と聞いた。特にアリシエル。」

その双眸がアリシエルを射抜いた。不機嫌そうにも見える。重い雰囲気は彼からあふれ出ている気もする。

それをものともせず、楽しそうに彼女は微笑んでいる。

「お前は王家の者だろう。早急に帰さねば、人が森に入ってきて森が荒れる」

驚いて固まるアリシエル。ウィリアムは食べようとしていたパンを落としてしまった。

彼に話さなかった。そのはずだ。

「それまで、仕事の邪魔にならない程度に遊んでる」

アルバスは食器を取って、キッチンに持っていった。それを見送ると、アリシエルが口を開く。

「何で分かったんだろう………不思議な人よね。

やけに古い言葉を使うし、頑固そうだし、辺鄙なところに住んでるし」

「そうだけど、詮索しなくていいだろ」

いい子ぶって、それッぽいことを言ってみたが、実はかなり気になる。

「うーん」

悩みこむアリシエルを見てると不安になってくる。

悩みこんだ後には変なことを必ず言いだすのだ。

この場合は予想が付く。

アリシエルはこっそりと子供みたいに話す。

「ねえ、あとで彼の書齋に忍び込みましょう。何か分かるかもしれない」

アルバスの低い声が響いてくる。

「一言いえば、入れてやる」

もう聞こえていないと思っていた彼女は、尻尾をつかまれた猫みたいに驚いて、
これまた、猫みたいにすねてしまった。

「ご飯を食べ終わってから、部屋を出る途中で「ホント、地獄耳」と言ったのもきかれて、
彼女は完璧にすねてしまった。

書斎は彼らのいた客間の反対にあった。

入り口には「神は永遠の輪廻を見守る」と書いたボードが掛けてある。

部屋の中には、部屋の奥以外の壁はすべて本棚で埋め尽くされていた。

奥には、ずっしりした質感の大机。

「うわあああ」

アリシエルは感嘆の声を上げる。

本は貴重な物、個人の家でここまでそろっているのは珍しい。

「これはすごい」

ウィリアムも感嘆の色を隠せない。
手に一冊取ってみるとそこには、各地の民族史がぎっしりと書き綴られていた。

もう一冊とってみると、今度は料理全集。

「ホントになんでもあるわね。これ、伝承の全集よ。

169巻まで全部あるわ。物好きな……………」

「こっちは、歴史書だ。うちやインデイスのもある。ってか、俺の知らない事も書いてある」

一通り、漁り奥にある本棚を覗くと一層の驚きがあった。

「この本棚……………全部、古代語よ」

「ほんとだ、北のも東のもある」

古代語は、文字通り昔使われていた言葉だ。今は僅かな資料を残すのみとなっており、

今の言葉の源流となっている。主に三種類の言葉が主流で、そのすべての種類の本がここに揃っているのだ。

門外漢の二人でも分かる。普通ではありえないことであった。学問所でもあるかどうか、そんな貴重な書籍が多く揃っていた。

「余計、謎が深まった気がする」

「ああ、俺もだ」

頭を抱えて部屋の中央にある長椅子に座りこむ。

教養深い貴族でも頭を抱えるような本が、なぜこんな辺鄙なところ

にあるのか。
ただの好奇で、漁ってみたがいらぬ物を見つけてしまった気がした。

アリシエルもぼんやりしている。悪戯を反省している子供のようだ。

ウィリアムは重い木の机の椅子の座っていた。
ふと、机に飾ってある金の盾を見た。

その盾には様々な紋章が書かれていたのが気にかかったのだ。

そのうちに、彼の祖国の国旗に描かれている紋章を目に捉えたからかもしれない。

うつすらとしか覚えていないが、アリシエルの国の紋章もあると思う。

私たちの友情を記念して

この絆は永劫の時を得てもこの

大地と空と海が存在する限り

日輪が大地を照らすことが潰えないように

母なる大地が恵みを失わないように

大いなる碧空と大海がその清さを失わないように

様々な英知と技巧が受け継がれるように

そして冥界を訪れ、また大地に巡る命がいなくならないように、

四方を司り、その守りを世界を与え、命を与え、育むことをの証とする。

私たちの名に誓おう。

アーサー・ハーツ・レオン

ヴィヴィアン・グラッド・レオン

アルバス・オー・アトウッド

セーラ・ラプチャ・アトウッド

モーリス・アンガー・ベル

何かの契約に見える。アルバス・オー・アトウッド。

それがアルバスの名前なのだろうか。

口に出そうとして思いとどまる。

昨日言われたばかりでないか。

彼の名前を知ったとしても許しがあるまで口にしてはならないと。

気になる名前はいくつかある。

モーリス・アンガ・ベル。

ウィリアムの祖国の建国の英雄。質素豪胆を志す工芸の神の名前。

そして、彼ウィリアム・ベル・グレンジャを始めたとする多くの者たちの始祖。

他の者も、力ある名前なのだろうか。

しかし、昨日の夜に誓った恩義に報いるという言葉。

ここで謎を謎としておくこともその内と思いい、彼は考えをひっそりと押しとどめた。

午後、ウィリアムはアルバスが薪拾いに行くといっているのでついつて行った。

アリシエルは置いていけと言われたので、どうにか宥めすかして留守番を頼んだ。

アルバスは、他より獣の少ない場所を選んで進んでいるようだった。

本人にそのことを言うと、お前のためだと返ってくる。

それはそうだ、俺じゃ幻獣は倒せない。といったら、そういう意味じゃないと言われた。まったく持って謎である。

獣が少ない場所を選ぶのに他に何か理由はいるだろうか。

だが、境の森の崖で出会った巨大な鳥を思い出して、避けてもらえるのは有難いので大人しく従う。

森に入って、歩いていると地面から木の根がいくらかも飛び出ているのが見える。

人の胴ほどもある木の根が、あちらこちらへと地面を這っていた。

いくつも越えて歩くの非常に苦労する。

「この森は歩き方が難しいな」

「ここは、ただの森じゃない。幻獣が住む森だ。普通の大きさだと木々はすぐに折れてしまう。

ただの森と思つたらすぐに森の養分になる」

「たとえば、どんなふうによ？」

「あそこにある、大木があるだろう」

左に見えるのは、他と少し色が違う以外には違いがないように見える木。それでも、やはり大樹と思える。人が二十人手をつないでやっと幹を囲めるくらい。

色が違うのは、緑色の苔がほとんどついていないため、木の茶色がきれいに見えるからであるのに彼は気づいた。

「あれは、木のまわりにある生き物から養分を吸い取る。近づくと吸い取られるから、長時間そばにいと、搾りかすになつてしまふ」

「ええ！」

「そんなのがたくさんあるから気をつけろ」

「はっはい！」

この人は、時折怖いことを何でもないかのように言ってくる。その度に、びっくりするのは心臓が悪い。

「まあ、大概はずっと移動してれば、問題ない」

彼は楽しそうな空気をまとって歩みを進めた。

乱れぬ足取りで、奥へ進むアルバス。やはり、森に住む人は違う。人の胸ほどもある木の根を平らな地面を歩くかのように突き進む。

着いたのは、他より木が小さい一帯。王都の周りにあるような木々が並んでいる。

進んで行って一本の木にたどり着く。

「これを持って帰る」

幹に手を当て、優しく擦りながら彼は言った。

見上げてみると、その木は他より小さかった。

それに葉っぱも少なく、全体的に潤いもない。なんだか、枯れ木に見えた。

「こんなのでいいのか。もうちょっと、大きいのなんてそこら中にたくさんあるだろ」

「これでいいんだ。この小ささが」

振り向かずに、その木をなで続ける。

彼はその木に語った。

「お前は他の木に負けてしまった。上手く伸びることも、もつないだろ。その身、私のために使わせてもらおう。私の名前において、死と生の巡りの一部として」

そう語る彼の背中はとても大きく見えた。なぜか、優しく見えた。

「切るぞ、気をつける」

「どうやって切るんだ？何も持ってきてないだろ」

その通り、アルバスは手ぶらであった。

ウィリアムも特に持ってきていない。

切った木を運ぶのに必要だと思って、勝手にウィリアムが縄を持ってきたくらい。

すると、彼はおもむろに右手を水平に伸ばした。

右足を一步前に出す。

「見てろ」

そう言ったが早い、右手を木の幹に叩きつけた。

木の割れる音がする。

そして、木の倒れる音、倒れようとする木は周りの木を巻き込み枝をいくつも折る。

そして、木の倒れるわずかな、しかし全身を揺さぶるような衝撃が地面を伝わってきた。

それはウィリアムは木を叩き折ったのかと思って驚いた。

しかし、それは違った。

木の断面は削り取ったかのように美しくなめらかで、年輪がハッキリと見て取れる。

アルバスは手刀で、木を切り倒したのであった。

「すじい……………」

すべてを理解した時、やはり感嘆の声しか出てこなかった。

持ってきた縄は、これにはだいぶ足りない。

アルバスは、落ちている木を拾うための縄しか持ってきていない。木をどうやって運ぶか、不思議に思っていたが方法は簡単であった。

道具なしで簡単かつ単純な運び方。

つまり、手運び。

「これ……………ちょ……………っと……………無理がある……………」

「なんだ、だらしない」

そういう問題ではない。

軽く見て、大人十人分は重い大きな木をたった二人で運ぶという発想がおかしいと思う。

しかし、アルバスは悠々と木の頭を持ってきた道に戻る。

枝はアルバスが切り落とした。

細いものから人の腕ほどまであるものまできれいにすっぱりと。今は、縄に縛って彼がすべて背負っている。

ああいうのは、俗に怪物だということだと思う。

引きずられながらも何とかついて行っていると、急にアルバスが止まった。

運んでいた木を抱くようにして運んでいたウィリアムは、頭を思いつきり、打ち付ける。

「じつふううう」

痛みあまり、足から崩れ落ちてそこから辺を転げまわる。

「急に止まるなよ！アルバス！」

しかし、反応は返ってこない。

彼は、木を手を持ったまま、空を見上げていた。

大木に気を払っていないのに、大木は微動だにしない。大した馬鹿力だ。

「バードが来たのか？」

何で鳥？

空を見上げると、豆粒ほどの何かが空を飛んでいた。

綺麗な光を後ろにたなびかせながら飛ぶその姿は、いっそ神々しい。

まじかで見ると、おそろくとても美しいだろう。

「ウィリアム、もう少し早くいくぞ」

「えっ！無理無理、絶対無理」

また抱えて、運ぼうとした途端、ウィリアムは木に引っ張られた。

「へ？」

急な加速がかかる、足が宙に浮いた。何か大きな音がする。周りの木々の木の葉が、いくらか舞い散り、しかしそれもあっという間に後ろに過ぎ去っていく。

「うわあああああああ！！」

絶叫しながらも必死で木にしがみつく。なぜ、走っているだけなのに周りの景色が流れるのだろう。

森に絶叫を響かせながら、二人はアルバスの家を目指した。

002(後書き)

ご意見ご感想があれば、書き込みください

003(前書き)

拙速をこころがけていますので、粗いです

木の家に戻ったのは、それから掛からなかった。

アルバスが、積み木か何かを運ぶように足早に歩いて行って、ウイリアムはそれに引きずられるようにしてついてきたからだ。

家の前の石が敷いてある小さな広場に辿りつくやいなや、

ウイリアムは倒れこんだ。

思考がとんでもなくらい空回りしている。

確実に人間じゃない。木を持って走れる人間など、人間とは認められない。

そんなことをしたら、ウイリアム達、騎士団の長く果てしない鍛錬。己を磨きあげ剣の技術を競い合う。それを、馬鹿力だけで薙ぎ払える。

しかし、しかしだ。あんな人間は滅多にいない。多分大丈夫、とりあえず戻らないといけない。

深呼吸をして、落ち着きを取り戻す。

心臓はいまだ、早鐘のよう、もしくは駆ける馬に馬蹄の音のよう。

汗もまだ、引かない。引きそうにもない。

もう一度、水をかぶらないと絶対に落ちつけない。

というか、人ではありえない速度を生身で体験するのは二度と得たくない体験であった。

アルバスは、大木を背負って、裏庭へ行った。

響いてくるこだまのような音から、木を薪に出来るよう割っているのだろう。

その響いてくる音も、軽い連続音で速さが恐ろしい。木を突く鳥の速さ。

「そう、落ちつけ俺。負けるな俺、これくらいの理不尽は予想できたじゃないか。」

崖から落ちた俺たちを助けられるくらいの人だぞ。そう動揺するな俺、落ちつけ落ちつけ」

今、考えれば崖から落ちて骨折していないのは、落ちている最中に拾われたからだろう。

そうすれば骨折も一切なくてすむ。

普通では信じられない話だが、今見たアルバスの運動能力を考えればできないこともない気がする。

「よっし！大丈夫、気を取りなおしていこう」

勢いをつけて、混乱を振り払うように飛び起きる。

肩を回して、気持ちを入れ替える。

建物の隣にある水汲み場の水を、勢いよくかぶる。

森の清い水は、意識の混濁を洗い流してくれる。

突然、家の中から爆音がとどろいてきた。何があったか、振り返ると、居間の窓から煙が見えた。

「アリシエル！」

上着を着る間も惜しんで駆ける。上着が濡れるが気にしてられない。彼女を探す。何があったのか心配であった。この森は人ならぬ者の領域、何が起こっても不思議ではない。

居間の中央。誰かと対峙していた。

それは、見知らぬ青年であった。真面目そうな栗毛で童顔の青年。しかし、浮かべる表情は、悪戯を嘘で隠してしまえそう。

ウィリアムは、彼の瞳にひどく純粹な感情を見つけた。陽気で子供っぽい、満ち溢れた悪戯心。純粹で危なっかしげ。着ている服もあまり見かけない。布に穴をあけて、そのまま被ったような服。

所々をブローチで留めてある。その上に、斜めに掛けた布をブローチで留めた上着。

高位の神官の服装によく似ている。

「なんだ、お帰りですか。残念、もう少しからかって置きたかったな」

悪戯っぽく部屋を見回した。

アリシエルがじりじりと後ろに下がっていく。栗毛の青年を睨みつけ、ゆっくりと後ずさる。

それを見て、その男はにっこりとほほ笑みかける。可愛い無邪気そうな笑みであった。子供っぽく、あけツぴろに笑う。人受けのよさそうな人だ。

だが、アリシエルの琴線には触れなかったようだ。

微妙にふるえている。青ざめて絶対に彼から目を離さない。警戒しているのがよく分かる。

一陣の風が吹き抜けた。カーテンが、踊るように揺れる。

アリシエルの黒髪が風に遊ぶ。青年の柔らかそうな栗色の髪もゆったりと乱れる。

優しい強風が、部屋をなぞるように吹き抜ける。森のにおいと共に、何かが通り抜けた。

「バード、もう少し大人しく、出てこれないのか」

アルバスが、風に乗ってきたように音もなく、部屋の柱にもたれ

かかっていた。扉の音もしない。

腕を組んで、その青年を呆れたように眺めている。

驚く二人を置いて、バードと呼ばれた青年が、大きく手を広げ大げさに右腕を胸へあて、腰をゆったりと折り曲げた。

「お父さん、お久しぶりです。僕は元気なのがとりえですから。他に良いところなど数えるほどしかありません」

顔を深く伏せたまま、バードは言った。

「良く言う。お調子者の悪戯ツ子。元気そうだな」

アルバスは鼻で笑いながらも柔らかな表情でバードに目をやった。

「はい、この通り。ピンピンしております。んで、この可愛い女性是谁ですか、そして彼女は今フリーでしょうか？」

アリシエルを見ながらよく澄んだ笑顔で、街にいる気障な軟派師のようなことを言う。

澄んだ笑顔で言われると、気が抜けそうになる。

「アホ、唐突にそんなことを言うな。こいつは、アリシエル。多分、その辺の王族だ。丁重にもてなせ」

「そうですか、そうですか。すみません、美しいお嬢さん。この不肖バード、先ほどの無礼をお詫びします」

バードがゆっくりとアリシエルに体を向けた。壁まで下がっていたアリシエルが、ビクツと怯えた。

「なあ、アリシエル。お前何されたんだ」

慌てて損することが多いなあ。と思いながら、ウィリアムが聞く。直後、ウィリアムは飛んできた木彫りの置物で頭を打った。星が見える、くるくると。

綺麗に入って、とても痛い。

アリシエルは顔を赤くして、叫んだ。

「『何された？』なんてデリカシーのないこと聞いてんじゃないわよ！ この気持ち悪い奴みたいなこと言わないで」

「気持ち悪いとは失敬ですね。ただ、暇そうなレディにお相手をして差し上げようかと」

ふらつく頭で考える。アホな話である、こんなところまで来て、女のご機嫌取りをするような軽い奴がいるとは思わなかった。

女性にとってはとても重要なことかもしれないがハッキリ言って、

「お詫びのしるしに今からお茶でも……………」

「ウルサイ！」

アリシエルが右手を向ける。手のひらを中心として、力が集まる。

一瞬のうちに、光は大きさを増す。一瞬の空白ののち、

純白の光球が放たれた。

「まで！ アリシエル」

時すでに遅し。

光は、バードに向かつて、一直線に飛んで行った。収縮と拡大を繰り返しながら、脈動する球体は空気を焦がす。

バードがにやりと笑うのが見えた。なぜかゾツとした。彼の右手が動きそうになる。

それよりも先に、光球が炸裂する音が聞こえた。

そして、木が落ちる乾いた音。焦げ臭い何か。

「やめないか、家を壊す気か。お前もだ、バード。軽いにもほどがある」

バードの足元に焦げた木のレリーフ。

煙を立てて、黒くなっている。

アルバスが投げたようだ。

「すみません、お父さん。ちょっとからかいすぎました。そちらの彼もすみません。驚かせてしまつて」

相変わらず笑いながら話しかけてくるバードという青年。さっきの笑みが焼き付いて、

目をしかめてしまう。あの笑みは戦場にいた時、闘技場に行った時、任務で討伐に行ったときに見たことがあつた。

自分の力をふるうのが嬉しくてたまらない。けれど、それを表に出したくない。

そう思つて取り繕つたときにもれる、好戦的な意志の表れだ。

返事をしなかったのを変に思ったか、じつと見てきた。視線で物思いから浮かび上がってくる。

「ああ、大丈夫だ」

「なにが問題ないよ！このスケベをどうにかしなさいよ！」

傍の背の低い柵をばしばし叩いてアリシエルは抗議してくる。

ウィリアムは身ぶり手ぶりを交えて、落ちつくように宥めすかす。

「まあまあ、ひとまず落ちつけ。とりあえず聞かないと始まらないだろう？ アルバス、彼は一体誰なんだ」

アルバスは、その青年に意味ありげな視線を向けた。青年も黙つてうなづく。

うってかわつて、しっかりとした表情を浮かべる。雰囲気もすつと落ち着く。

春の晴れ空のような透明で、空の高いところにいるような空気を纏う。

「申し遅れました。この我が父、アルバスが息子。 バード・レノンと申します。先ほどは申し訳ありません。

少し、遊びが過ぎてしまいました」

「俺はウィリアム・グレンジャ。こっちはアリシエル」

「アリシエル・ディオ」

ふてくされてウィリアムを睨みつける。

ここにいてからの、流れが自分を置いて行っているようで面白くない。彼女はそう思う。

ウィリアムは、それが分からず、機嫌が悪くなっていく、彼女にひやひやしていた。

「ディオ」にグレンジャ。これは驚いた。エンデイスの王族様に、

バンプルグ公国の主力貴族さまじゃないですか。よくこんなところにいますね。どこで拾ってきたんですか」

犬か猫のような言い草だが、拾われてきたのは間違いないし、多分猫みたいに引つ掴まれてここまでアルバスに連れて来られたのだから

うから
そんなにきつくも言えない。

件の会話にあったバンプルグ公国はウィリアムの祖国である。彼の故郷、大きな砦を首都に据える国。

「境の森に落ちてたんだ。遊んでいたらしい」

バードはからからと笑う。堅そうに見えて、結構おちゃめなところがある彼は、その実よく笑う。

笑ったところが怖くて、笑ったように見えないこともあると思うから、やっぱり堅そうに見える。

「あんなところで遊んでいたんですか。そりゃ、落っこちますよ」

「いや、俺が《約束の十字》を落っこちたからなんだ」

「あれ落っこちたんですか！駄目じゃないですか、お父さん。あれは、あなたもご存じのとおり……………」

「なあ、聞きたいことがあるんだけどいいか？」

お説教が始まりそうだったので、途中で割り込んだ。

バードはアルバスの方を向いて、こちらを忘れていたようだった。

「何でしょうか？」

聞きたいことはいっぱいある。バードが訪れてまた一層増えた。色々、疑問が浮かんだ結果出た疑問は

「なあ、あんた。なんで俺らのことを知ってるんだ」

アリシエルは曲がりなりにも王女だから、彼らのいる避暑地の周り数里に渡って名前が知れ渡っている。

貴族の名前は知られていて当然だが、そんなに名を売る行いをしておらず、それに異国人であるウィリアムはどう考えてみても社交界以外で知られている気がしない。

普通の人には見えないが、彼が知っているのは不思議だった。

「職業柄、色んなことが入ってくるんですよ」

「あなた、何をしているの」

「配達屋といいますが、手紙とかを配っています」

「ふーん」

「でもさ面白いよな。配達屋でバードなんて。伝令の神様の名前だろそれ」

「そう言われてみればそうね」

「ええ、父があやかってつけたのです」

「ねえ、なんでもう少し強い神様の名前にしなかったのか？」

伝令役なんて、どう考えても強そうではないんだけど」

言った途端、バードから威圧感があふれ出てきた。びっくりして彼を見ても涼しげな笑顔に変わりはない。

それどころか、満面の笑みを浮かべている。少し考えるだけで人の名前を、揶揄したも同然であることに気づく。

「あっいや、伝令も大切な仕事だよな。うんうん、そう良い名前だよ」

「それで、今日は何の用だ？暇つぶしってことはないだろう」

アルバスが思い出したように言った。

「ええ、そうです。実は、この二人に関してのご報告がありまして」「私たち？」

「そうです、アリシエル。あなたたちについてです。」

このままというのもなんなので、一度落ち着きましょう。

お父さん、僕はお茶を淹れてきます」

「ああ、分かった。アリシエル、ウィリアム。」

そこに座りなさい」

お茶とお茶菓子を淹れて準備が整った。

それにしても、この家はお茶が好きだと思う。
男二人であつたら、もう少し粗野であつてもおかしくないと思うの
だが。

「今日、私が来たのはこの二人についてのことです。」

詳しく言うと、エンディスとバンブルグについての話です」

「俺たちの祖国がどうかしたのか」

「実は、あなた方二人の行方不明について、もめているのです」

ウィリアムが、小さく考えていたことが現実になった。

「つまり、戦争？」

アリシエルが、厳しい目をして言う。

「ご察しの通りです。今、二国は戦争の準備をしています」

「そんな！大公殿下がそんなことをするわけッ！」

ウィリアムが激情に身を任せそうになる。

アリシエルが彼の袖をひっぱり、落ちつかせる。

さっきまで、愛想のよい笑みを浮かべていたバードも、
真剣な顔をする。

「ええ、バンブルグ公国の大公は乗り気ではありません。」

それに、エンディスの王君もです。

しかし、エンディスの大貴族たちが主戦派になっているのです」

「何故？私はそれ程に権力を持たないわ。そこまでする必要はないはず」

「権力は持ちません。しかし、あなたは教会の次期教主です。象徴としての要を失いそうな教会が焦っているのですよ」

「まったく、頭の悪い連中だ。バード、どれくらいの戦力が動いている」

「両国ともに騎士団は動かしていません。上層部はあまり動きたがっていませんから。」

しかしながら、エンデイスのリッケンバック 男爵が勇んで兵を集めています。

だいたい、師団二つ分くらいでしょうか。

対して、バンブルグはエンデイスの国境を守る皆に人員が一万ほど投入されるそうです」

「まっ、まっ。なんでそんなに知っているの？」

アリシエルが間に挟まる。情報、軍事力は国の命綱。こつもたやすく知られては、国防の枢軸にかかわる。

「そうだ、戦力は機密であると思うんだが、なぜ知っている」

バードとアルバスを射抜くような目で見る。

動きを起こしたのはアルバスであった。

「今はそんなことどうでもいい。できたら、あとで教えてやる」

「でもっ……………」

バードに肩を掴まれる。

「やめてください。父を怒らせると怖いですよ」

体が痺れてくる。バードの右手が、仄かに光っているのに気づいた。

魔法、それも意識を奪う類の。

対抗しようと、体の力を巡らせる。耐性を高める。絶対に負けぬよう。

相手と均衡したと思った。実際に相手の力が弱くなった。

だが、変だ。

押し寄せた力が弱くなったのとは違う気がする。

津波が来る前に、潮が引く時の感触に似ている。

それを理解した時、一斉の力の本流が彼女を包みこんだ。

「きゃっ」

風船がはじけるような感触とともに、意識がまた浮かびあがってきた。

前に座るアルバスが見えてくる。

「おい、大丈夫か」

ウィリアムの声も聞こえる。けれど、まだ頭がぼんやりしている。魔法に酔ってしまった。

「話の続きをしよう。二人とも大人しく聞いてください」

一瞬の攻防だったが、多大な力が使われた。

動きも、派手さもない。しかし、多くの技巧と力が使われた。

それでも、バードは安穩としている。

彼に深い謎を見た気がした。

「この戦争は、あなた方がいなくなって起こるものです。

つまり、です。あなたたちを返せばよいのです」

「そうだ、ウイリアム、アリシエル。まだ動けないだろうから、俺が送ってやる。準備をしとけ」

「えっ？」

「私たちが帰れば、この戦争の理由がなくなる。そういうことね」

「そうです。そもそも、この戦争が布告された理由は君たち、二人という身分のある人間がお互いの国から一人ずつ消えたことにあります。

ここで二人がお互いの陣営に自分達はただ、幻獣に襲われただけだ。とでも言え ば、この宣戦布告は理由を失います。そうすれば、大公も国王も、大義名分を失った宣戦布告を取り

消すでしょう」

手順を説明してるように、バードは言った。

「幻獣の仕業にすればいいんだな」

「そうです。嘘をつくわけでもないので上手くいくでしょう。」

もし、話がこじれそうになったら、その時は僕がお父さんがなんとかします」

「なんとかできるの?」

「できる。それは保障する。さあ、明日になったら出発だ今は休め。

……バード」

「はい」

「後で、俺に部屋に來い」

彼はそのまま去ってしまった。

「さあ、明日から大変になります。今日はもうゆっくりしてください
夜は早めに寝てくださいね」

ウィリアムは、そういう彼の顔がなぜか、仮面のように思えた。
何故だかは分からない。でもそう思えた。

その日のうちに森を抜けるために、朝早くから家を発った。
アルバスの家の前にあった道を進んで行った。

始めは、木を取りに行ったあの時のように、大木のそばへたつ、

人の手が届かない森林。
その森林越えは予想以上に恐ろしい物であった。
人の感覚では追いつけない世界。それを肌で感じる。

蔦が大木に絡みつき、木の頂上まで伸びる。

木の枝から木の枝に蔦が伸び網目となっている。

木漏れ日となつている日の光も、更に幾筋の線条となつて、夜空に星のように差し込む。

色鮮やかな鳥が群れをなして飛んでいる。

獣道を歩いていると、周りの木々に大きな栗鼠のような生き物が木の虚から顔を出す。

それを狙う狗のような生き物が、草陰に入ったとたん、狗の悲鳴が聞こえた。骨の折れる音。

しかし、それはこの森では当たり前。

一歩歩を進めるごとに、見たこともない生き物を見つけ、それを見るのとほとんど等しい数の生死を見ることがとなった。

時折、垣間見える大きな物影、襲われた巨鳥のような幻獣が通り過ぎるのが見える。

まさしく、獣の楽園。

一歩歩むのも、恐れを感じる。命の危機を絶えず感じる。

聞いた話によると、ここから街までは、一時間もかからない距離しかないという。

しかし、朝から出るとは不思議だった。

だが、今となつては分かる。

この森はただの人間を拒絶する。

前に行くアルバスとバードは平然と進んでいる。前をいく二人は平然としているのに、アリシエルもウィリアムもまったく足が前に進まない。少しであろう道程が、永遠の旅路にも思

える。

獣たちが存在するだけで放つ、濃厚な存在の感触が人の感覚を削り取っていく。

足の感覚は、獣道に入っただけで麻痺している。意識もゆっくりと薄れていくような気がする。地面は、腐葉土でしつかりしないのに、それ以上に柔らかいようで沈んでしまいそう。

アリシエルがふらつく。慌てて支える。

絹糸のように滑らかな彼女の髪が、彼女の顔を隠す。支えるウィリアムの腕を、柔らかい手がギュッと掴む。

「おい、アルバス！これはなんだ」

アルバスは、太い木の根の上にもたれかかって座っていた。

涼しい顔をして、空を見上げる。僅かな木漏れ日が、彼の緑の目に差し込んだ。

「ここは、幻獣の森の中央だ。人とは存在の大きさが違う。お前たちのように、初めて入るものには重すぎるのだろう。アリシエルは魔法を使う。それで余計にここの空気を感じ取っ

ているのだろうかよ」

その言葉とともに、森のざわめきが増す。圧倒されるような重たい空気。

ウィリアムは足から崩れ落ちそうになる。

その重みを楽しむようにしているアルバスを恨めしく思う。

アリシエルがウィリアムを見ている。
その瞳は、強い意志をたたえていた。

「ウィリアム、支えて。早く森を出なくちゃ」

ウィリアムは、アリシエルを支えて歩き出す。

ここは自分で越えなければならにのだろう。

恩義の約束をしたあの時の言葉を思う。

彼は、俺に大きな試練が訪れると言った。

森の隠者の言葉。信じてみようと思う。

ならば、この程度は、自分の足で越えて見せよう。

一步を踏み出す。

地面を揺らす心意気とともに。

木の葉が少しだけ、落ちてきた。

バードが笑う。

「いきましようか」

二人は、光が散り舞う森の中、幻獣の存在を背に受け、怯えながら、それでも前に進む。

越えた後、ウィリアムは、森の先にある河の所で力尽きた。アリシエルも気絶する様に、倒れる。

「かつはあああ」

河の水をかぶり、河原に横になる。

森を抜け、青々とした空が見える。まだ、森の端が見えるが獣たちは河にさえぎられるかのように入ってこない。幻獣たちの生命力が立ち込める森。

遠目で見ても、その躍動は輝かしい光を放つ、アリシエルを支えながら歩く道のりは長くはなかった。しかし、厳しかった。

「どうですか。森越えの感想は」

バードが尋ねる。

横でもう寝入ろうとしているアリシエルを見る。

「きまつてるじゃないか、上々さ」

「でも、もうあんまり体験したくないわね」

「よろしい。獣の森を越えた事、これは将来への道しるべとなるでしょう。」

あなた方のこの経験は、地となり肉となる。

さあ、今は休みなさい。そうしたら、争いを止めましょう」

空は森とは違い、青かった。何もさえぎらない空。何度も見えてき

たはずだけど、今この時には喜ばしい物。

何かが戻ってきた気がした。

森の反対側を見る。次に進み道が見えた。塵気楼のように揺れる影が遠くに見える。

戻るべき街、彼の住む一時のオアシス。

貴族たちの避暑地へと進み道が広がる。そう遠くない場所にある。戦争が始まるのなら、あそこに戻るしかない。彼はそう思っていた。

003(後書き)

8/24 大幅改稿

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4953v/>

彼らの聖域の番人

2011年10月8日13時57分発行